

# 『俱舍論』三世実有説批判（和訳）<sup>1)</sup>

AKBh 295, 2~301, 16 ad AK V 25~27

秋 本 勝

## (1) 構成

- I 序 (295, 2~5)
- II 三世実有説 (295, 5~6)
  - II-1 第一教証 (295, 7~12)
  - II-2 第二教証 (295, 13~16)
  - II-3 第一理証 (295, 16~19)
  - II-4 第二理証 (295, 20~296, 1)
  - II-5 説一切有部と呼ばれる理由 (296, 1~6)
- III 四大論師の異説とその批判 (296, 6~8)
  - III-1 四大論師の異説
    - III-1-1 第一説 [ダルマトラータ (法救) 説] (296, 9~14)
    - III-1-2 第二説 [ゴージャカ (妙音) 説] (296, 15~18)
    - III-1-3 第三説 [ヴァスミトラ (世友) 説] (296, 19~21)
    - III-1-4 第四説 [ブツダデーヴァ (覺天) 説] (297, 1~3)
  - III-2 四大論師説批判
    - III-2-1 第一説批判 (297, 4)
    - III-2-2 第二説批判 (297, 4~6)
    - III-2-3 第四説批判 (297, 6~8)
    - III-2-4 第三説 (世友の位相説) が有部の正統説 (297, 8~10)

---

1) 本稿は『仏教実在論の研究』(上)の第1章の改訂版である。

Ⅲ - 3 三時の位相は作用により区別される (297, 10~13)

Ⅳ 作用説批判

Ⅳ - 1 作用説批判その一 (297, 13~17)

Ⅳ - 2 作用説批判その二 (297, 17~20)

Ⅳ - 3 作用説批判その三 (297, 20~298, 3)

Ⅳ - 4 作用と存在要素とが別なものでないとき

Ⅳ - 4 - 1 三世は不成立 (298, 4~10)

Ⅳ - 4 - 2 「三世実有かつ無常」は不合理 (298, 10~22)

Ⅴ 二教証・二理証批判

Ⅴ - 1 第一教証批判

Ⅴ - 1 - 1 第一教証批判その一 (299, 1~8)

Ⅴ - 1 - 2 第一教証批判その二 (299, 8~11)

Ⅴ - 1 - 3 第一教証批判その三 (299, 12~16)

Ⅴ - 2 第二教証批判 (299, 16~18)

Ⅴ - 2 - 1 第二教証批判その一 (299, 18~20)

Ⅴ - 2 - 2 第二教証批判その二 (299, 20~25)

Ⅴ - 2 - 3 第二教証批判その三 (299, 25~300, 6)

Ⅴ - 2 - 4 第二教証批判その四 (300, 6~12)

Ⅴ - 2 - 5 第二教証批判その五 (300, 12~18)

Ⅴ - 3 第一理証批判 (300, 18~19)

Ⅴ - 4 第二理証批判 (300, 19)

Ⅴ - 4 - 1 第二理証批判その一 (300, 19~21)

Ⅴ - 4 - 2 第二理証批判その二 (300, 21~301, 6)

Ⅵ 結び (301, 6~11)

## (2) 和訳

### I 序 (295, 2～5)

ところで、この過去のもの・未来のものは、実体として<sup>2)</sup>存在するのか、しないのか。もし [実体として] 存在するなら、因果的存在 (saṃskāra) は、すべての時間に存在するから、恒常であるということになる。また、もし [実体として] 存在しないなら、どうしてそれ (過去・未来のもの) に対してそれ (過去・未来の随眠 anuśaya) と結びつき、または、離れるのか<sup>3)</sup>。毘婆沙師 (= 説一切有部) は「因果的存在は恒常である」とは主張しない。[因果的存在は、生・住・異・滅の四つの] 因果的存在の特徴 (saṃskṛtalakṣaṇa)<sup>4)</sup> と結びつくからである。

### II 三世実有説 (295, 5～6)

ところが、明らかに主張される、

[存在要素は過去・未来・現在の] すべての時間に存在する。[25a]  
[と]。

#### II-1 第一教証 (295, 7～12)

どうしてか。

[經典に] 説かれているからである。[25a<sub>2</sub>]

- 
- 2) AKBh 295, 2: -nāgatam ucyate を -nāgatam dravyato と訂正。cf. D 239a2: ci 'das pa dang ma 'ongs pa' i dngos po rdzas su yod 'on te med, P 279b5: ci 'das pa dang ma 'ongs pa 'di rdzas su yod 'on te med; 真諦 257b29: 過去未來為実有物為假名有, 玄奘 卷二十の一左: 応弁諸事過去未來、為実有無方可説繫。
- 3) SA 468, 24～25: *katham tatra tena ca saṃyukta* iti. *katham atītānāgate vastuni. tena cātītānāgatenānuśayena saṃyukta* iti *visaṃyukto vā*. なお、"*saṃyukta* iti *visaṃyukto vā*" の主体は *pudgala* である。cf. AKBh 294, 4: *yasya pudgalasya yo 'nuśayo yasminn ālambane sa tena tasmin saṃprayuktaḥ* ...
- 4) cf. AKBh 75, 18～20 ad AK II 45cd.

なぜなら、世尊によって「次のように」説かれたからである。「比丘らよ。もし過去の物質的存在 (rūpa) がなければ、教えを聞いた聖弟子が過去の物質的存在に対する関心を捨てる<sup>5)</sup>ことはないであろう。過去の物質的存在があるから、教えを聞いた聖弟子は過去の物質的存在に対する関心を捨てるのである。もし未来の物質的存在がなければ、教えを聞いた聖弟子が「未来の」物質的存在に対する楽しみを捨てることはないであろう。「未来の物質的存在が」あるから、「未来の」物質的存在に対する「楽しみを捨てるのである」と云々<sup>6)</sup>。

## II - 2 第二教証 (295, 13~16)

【認識は】二【に依拠して生じる】からである。[25b<sub>1</sub>]

「二に依拠して認識は生じる。」<sup>7)</sup>と「世尊によって」説かれている。「二」とは何か。眼と色形、乃至、意 (manas) と観念 (dharma 法) の「各々二」である。逆に、過去・未来のものが存在しないなら、それを対象とする認識が二に依拠して「生じることは」ないことになろう<sup>8)</sup>。

以上のように、まず經典に基づいて、過去・未来のものは存在する【と有部は言う】。

## II - 3 第一理証 (295, 16~19)

論理に基づいても【過去・未来のものの存在は証明されると有部は言う】。

---

5) ふつう「無関心となる」と訳すところであるが、櫻部建先生は「〈関心を捨てる〉という訳の方がより良い」と言われていた。よって、『俱舍論』ではそのように訳す。

6) 本庄2014 : 671~672 [5016] 参照。

7) 本庄2014 : 673 [5017] 参照。

8) 二つに依拠して生じ、しかも過去・未来を対象とする認識とは意識 (manovijñāna) のことであり、この教証は次の第一理証と内容的に同じものである。SA 469, 13~14: na dvayaṃ praṭītya manovijñānaṃ syāt yad atītānāgatā-lambanam iti viśeṣaḥ. cf. 梶山1983: 20~31.

[認識は、実] 在する対象 [に基づいて生じる] からである。[25b<sub>2</sub>]

対象が存在するとき認識は生じ、[対象が] 存在しないとき [認識は生じ] ない。もし過去・未来のものが存在しないなら、認識は存在しないものを対象とすることになってしまう。[ところが、存在しないものを対象とするような認識はないのである。] 従って、[過去・未来のものが存在しないなら] 認識そのものが[生じ]ないことになってしまう<sup>9)</sup>。認識対象が存在しないからである。

#### II - 4 第二理証 (295, 20~296, 1)

[行為の] 結果 [がある] からである。[25b<sub>3</sub>]

また、もし過去のものがないなら、善悪の行為の結果がどうして未来にあるうか。というのは、結果が生じるとき、[結果が] 熟するための原因は [過去にあって] 現在にはないからである。従って、「過去・未来のものは必ず [実] 在する」とヴァイバーシカ派 (=有部) は [主張する]。

#### II - 5 説一切有部と呼ばれる理由 (296, 1~6)

そして、一切が有るという主張があれば、それによって必ずこのこと (=過去・未来のものの実在) が認められている、と伝説される。なぜなら、

それ (過去・未来・現在のものの一切) が有ると説くから、説一切有部と認められる [からである]。[25cd.]

なぜなら、「過去のもの・未来のもの・現在のもののすべては [実] 在する」と説く人々が説一切有部であるからである。

しかし、ある人々は「現在の結果とまだ結果を与えていない過去の [行為]

---

9) SA 469, 15~16: sādhanam cātra. sadālaṃbanam eva manovijñānam. upalabdhi-svabhāvāt. cakṣurvijñānavad iti. 梶山1983: 20~31. なお、『俱舍論』の二教証及び二理証については各々、TSP 615, 24~616, 6が「理証一」、TSP 616, 6~9が「教証二」、TSP 616, 9~12が「理証二」、TSP 616, 15~19が「教証一」に相当する。

とは存在するが、すでに結果を与えた過去の〔行為〕と未来の〔行為〕とは存在しない。」と分けて説くが、彼らは分別説部である。

### Ⅲ 四大論師の異説とその批判 (296, 6～8)

#### Ⅲ-1 四大論師の異説

また、この説一切有部〔の論者〕は何種類か〔たとえば、次のように〕言う。

四種類〔の論者〕である。彼らは〔各々、三時の違いを〕様態の違い、特徴の違い、位相の違い、見方の違いとする者と呼ばれる<sup>10)</sup>。〔25d<sub>2</sub>～26ab〕

#### Ⅲ-1-1 第一説〔ダルマトラータ（法救）説〕 (296, 9～14)

大徳ダルマトラータ（法救）は、様態の違いとする者である。この人は〔次のように〕説いたと伝説される。

存在要素 (dharma) は、〔過去・現在・未来の〕時間にあるとき<sup>11)</sup>、様態の違いはあるが実体の違いはない。たとえば、金の器を壊して作り変えるとき、〔その器の〕形の違いはあるが、色の違いはないように。また、牛乳がヨーグルトとして変化するとき、〔その〕味・効力・熟成度を失うが、〔白という〕色を〔失わ〕ないように、そのように、存在要素も未来時から現在時へやってくるとき、未来という様態を捨て去るが実体であることを〔捨て去ら〕ない。同様に、現在時から過去時へ行くとき、現在という様態を捨て去るが実体であることを〔捨て去りはし〕ない〔と〕。

---

10) 以下の AKBh に記述される四論師の説から作用説までは、婆沙 396a10～b23、TSP 614, 7～14 = 第一説、614, 15～18 = 第二説、614, 19～25 = 第三説、615, 3～6 = 第四説、615, 8～19 = 第一・二・四説批判、616, 24～617, 8 = 作用説) に相当する。

11) 有部では、時間 (adhvan) と因果的存在 (samskr̥ta) とは同義である。cf. 婆沙 393c4～7; AKBh 5, 3～4 ad AK I 7c. 時間を実在と見る部派が存在したことは、婆沙393a9～17; 700a26～b2で知られる。

### Ⅲ-1-2 第二説 [ゴーシャカ (妙音) 説] (296, 15~18)

大徳ゴーシャカ (妙音) は、特徴の違いとする。この人は [次のように] 説いたと伝説される。

存在要素は、[過去・現在・未来の] 時間にあるとき、過去の [存在要素] は過去の特徴と結びつくが、未来・現在の特徴と離れるわけではない。[同様に、] 未来の [存在要素] は未来の特徴と結びつくが、過去・現在の特徴と離れるわけではない。同様に、現在の [存在要素] も [現在の特徴と結びつくが] 過去・未来の [特徴] と離れるわけではない。たとえば、男が一人の女を愛しているとき、他の [女] を愛していないというわけではないように [と]。

### Ⅲ-1-3 第三説 [ヴァスミトラ (世友) 説] (296, 19~21)

大徳ヴァスミトラ (世友) は、位相の違い [による] とする。この人は [次のように] 説いた、と伝説される。

存在要素は、[過去・現在・未来の] 時間にあるとき、それぞれの位相に達して、それぞれ [つまり、未来または現在または過去] と呼ばれる。位相の違いによるのであって、実体の違いによるのではない。たとえば、一つの [計算] 玉<sup>12)</sup>が一の位に置かれると一と呼ばれ、百の位に [置かれると] 百と [呼ばれ]、千の位に [置かれると] 千と [呼ばれる] ように [と]。

### Ⅲ-1-4 第四説 ブッダデーヴァ (覚天) 説 (297, 1~3)

大徳ブッダデーヴァ (覚天) は、相対性の違い [による] とする。この人は [次のように] 説いた、と伝説される。

存在要素は [過去・現在・未来の] 時間にあるとき、前後に相対して、それ

---

12) AKBh 296, 20: vartikā. cf. SA 470, 9: gulikā; TSP 614, 21: mṛdguḍikā; 真諦 258a15: 畫; 玄奘 卷二十の三右: 籌。

ぞれ [つまり、未来とか現在とか過去] と呼ばれる<sup>13)</sup>。たとえば、一人の女が母とか娘とか言われるように [と]。

以上の四 [説] が説一切有部説である。

### Ⅲ－２ 四大論師説批判

#### Ⅲ－２－１ 第一説批判 (297, 4)

[以上に] 対して、これら [四説] のうちの最初の [ダルマトラータ] は、転変 (pariṇāma) を説いているから、サーンキヤ派の主張に含まれるべきである。

#### Ⅲ－２－２ 第二説批判 (297, 4～6)

第二の [ゴーシャカ] には、時間の混乱が帰結する。[なぜなら、三時の] すべての [存在要素] が、[三時の] すべての特徴<sup>14)</sup>と結びつくからである。また、男の、或る女に対する愛が現に起こっているとき、別の女に対しては [愛する可能性を] 備えている (samanvāgama)<sup>15)</sup> だけであ [って、愛が現に起こっているわけではない] から、どうして [比喩と主張との間に] 同一性があ

13) SA 470, 14～16: 「前即ち過去または現在に相對して未來と呼ばれ、前である過去または後である未來に相對して現在と呼ばれ、後即ち未來または現在に相對して過去と呼ばれる」。なお、AKBh 297, 2の “avasthāntarato (na\*) dravyāntarataḥ” の句は、P281b3～5及び真諦 258a17～24、玄奘 卷二十の三右～四左に相当句がないことから削除する。\* プラダンは、‘na’ は写本にないが挿入するとする (297, n.2)。但し、婆沙 396b4に「体雖無別由待有異」とあり、また、Frauwallner (1973: 99, 30～31 & n.10) は、nāvasthāntarato na dravyāntarataḥ とする。cf. SA 470, 19: pūrvāparāpekṣayā na dravyāntarataḥ。

14) AKBh 297, 5: sarvaḥkṣaṇayogāt kṣaṇaḥ ca lakṣaṇaḥ と訂正。cf. P 281b5～6: tham cad la mtshan nyid tham cad dang ldan pa’ i phyir ṽ; 真諦 258a22: 一切世与一切相相应故; 玄奘 卷二十の四左: 三世皆有三世相故。

15) cf. SA 470, 2～3: śeṣāsu strīṣu rāgaḥprāptir evāsti na samudācāra iti.

ろうか<sup>16)</sup>。

### Ⅲ-2-3 第四説批判(297, 6~8)

第四 [のブツダデーヴァ] には、同一の時間に [過去・現在・未来の] 三時があることになる。[即ち] 過去時の中の前後の瞬間が過去・未来であって、真中の瞬間が現在となる。未来時においても同様である。

### Ⅲ-2-4 第三説(世友の位相説)が有部の正統説(297, 8~10)

従って、このすべて [の論者] のうちで、

第三の [ヴァスミトラ] がすぐれている。[26c<sub>1</sub>]

位相の違いとする [論者] である。

### Ⅲ-3 三時の位相は作用によって確立される(297, 10~13)

その [論者] に関しては、[次のように] 伝説される。

三時 [の位相] は作用 (kāritra) によって確立される。[26c<sub>2</sub>d]

かの存在要素は、[まだ] 作用しないとき、未来のものである。[作用] するとき、現在のものである。[作用] して消滅したとき、過去のものである<sup>17)</sup>。以上のことはすべてよく知られている。

## Ⅳ 作用説批判

### Ⅳ-1 作用説批判その一(297, 13~17)

しかしながら、次のことが説明されるべきである。もし過去のものも未来の

---

16) ヤショーミトラは SA 470, 28~30で「比喻の場合と同様なら、dharma に一つの lakṣaṇa だけがあって他の二つの lakṣaṇa はないことになる」という意味の註釈を加えている。cf. TSP 615, 15: …na sāmyaṃ dṛṣṭāntasya dārṣṭāntikena.

17) cf. 婆沙 393c13~16; 396b5~8; TSP 616, 24~617, 8; SA 470, 3~5. なお、Frauwallner1973 (102, 18~106, 13) は、位相説と作用説とはもともと同名異人の Vasumitra によって唱えられたとする。

ものも実在するなら、なぜ過去のもの、未来のものと言われるのか。

〈有部〉「三時〔の位相〕は作用 (kāritra) によって確立される。[26c:d]」  
と説かれているではないか。

〈答論〉もしそうなら、[視覚] 機能をもたない (tatsabhāga 彼同分の) 現在の眼にどんな作用があるのか<sup>18)</sup>。

〈有部〉結果を与えたり取ったりする〔作用〕がある。

〈答論〉では、[同類の結果を生じさせる] 過去の同類因等も結果を与えるから、[過去のものも] 作用する〔即ち現在である〕という過失に陥る<sup>19)</sup>。あるいは、[過去のものも結果を与えるという] 半分の作用をする〔即ち半分現在であるという過失に陥る<sup>20)</sup>〕。このように〔過去のものにも現在の〕特徴〔があるという〕混乱が〔起こることになる〕。

#### IV-2 作用説批判その二 (297, 17~20)

また、次のことも言わなければならない。〔即ち〕そ〔れ自身〕の本体をもって存在する存在要素が、常に作用することに対して

**どんな妨げがあるのか。[27a<sub>1</sub>]**

〔即ち〕それによってあるときは作用し、あるときは作用しないような〔どんな妨げがあるのか〕ということである。諸原因 (pratyaya) が完全にそろわないこと〔が妨げである〕、と言うなら、それはおかしい。〔原因も〕常に存在することが認められているのであるから。

---

18) cf. SA 417, 7~11; TSP 617, 8~13. 正理 631cl~14では、視覚機能 (darśana) を作用には含めない。cf. 婆沙 393c26~394a15. なお、彼同分 (tatsabhāga) については、AKBh 28, 1~6; 28, 20~22 ad AK I 39cd 参照。

19) cf. SA 471, 11~20; TSP 617, 14~18. 正理 631cl~14では、作用 (kāritra) を「引果の機能」とするから、取果・与果 (phaladānaparigraha) のうちの取果のみが作用である。cf. TSP 617, 19~23. 取果・与果の時間については、AKBh 96, 17 ad AK II 59c; 97, 9 ad AK II 59d 参照。cf. SA 471, 17.

20) cf. SA 471, 20~27; TSP 617, 8~9.

#### IV-3 作用説批判その三 (297, 20~298, 3)

そして、その作用〔自体〕が過去とか未来とか現在と言われる<sup>21)</sup>ような、  
そんな〔作用〕はどのようにしてあるのか。[27a]

作用にもまた別な作用があるのか<sup>22)</sup>。また、もし作用は過去でも未来でも現在でもないなら、因果的存在ではない (asamskrta 無為) から、〔作用は〕常にあることになってしまう。従って、〔まだ〕作用しないとき、存在要素は未来である〔等々〕と言うべきではない。

#### IV-4 作用と存在要素とが別なものでないとき

##### IV-4-1 三世は不成立 (298, 4~10)

〈有部〉もし作用は存在要素とは別なものなら、そのような誤りがあるろう。  
しかし、それ(作用)は、

〔存在要素と〕別なものではない<sup>23)</sup>。[27a]

従って、そのような誤りはない。

〈答論〉それなら、それ(存在要素)は、

〔過去・現在・未来の〕時間と結びつかない。[27b]

もし作用は存在要素に他ならないのなら、〔作用による時間の区別が不可能であるから、〕どうして、その存在要素がそれ自身の本体をもって存在しながらあるときは過去と言われ、あるときは未来と言われるのか。従って、三時の確立は不可能である。

---

21) SA 472, 3: siddhānta uparatakāritram aṭṭam ity evamādivacanāt. また、SA 470, 3~5及び AKBh 297, 12~13参照。

22) cf. TSP 619, 23~620, 10.

23) cf. TSP 617, 24~619, 18; TS1793~1800etc.

#### IV-4-2 「三世実有かつ無常」は不合理 (298, 10~22)

〈有部〉<sup>24)</sup>それでは、[まだ] 生じていない存在要素が未来であり、生じて [まだ] 消滅していない [存在要素] が現在であり、消滅した [存在要素] が過去であるということについて、何が成立しないのか。

〈答論〉今や、以下のことが説明されるべきである。

もし現在のものが実在するごとくに過去・未来のものも実在するなら、それに [即ち]

そのように [実] 在する [存在要素] に、「[未だ] 生じていない」・「[既に] 消滅した」ということがどうして [起こる] のか。[27b2c]

それ自身の本体をもって存在する存在要素に、[まだ] 生じていないとか [すでに] 消滅したということがどうして成り立つのか。これ (存在要素) に、それが無いから [まだ] 生じていないと言われるような何が以前にはなかったというのか。また、それが無いから滅したと言われるような何が後になくなるというのか。従って、「前に無くて今存在し、存在し終わってもはや存在しない」ということが認められないなら、三時はどうしても成り立たない。

「因果的存在の特徴と結びつくから、恒常であるという過失に陥ることはない」と言っても、それはことばだけで [実態が伴わない]。生滅と結びつかないからである。そして、「存在要素は確かに常に存在し、且つ、恒常でない」というこのような [前後相矛盾する] 論法はかつてないものである。

[ある人が次のように] も言った。「『本体は常に存在し、かつ様態は恒常とは認められない。しかも、様態は本体と別なものではない。』とは、明らかに

---

24) 宝疏・国訳一切は経量部の議論ととるが、光記・Poussin1971は有部の議論とする。いずれに取ることも可能であるが、ここでは前者と採っておく。cf. D 241a1: chos gang ma skyes pa de ni ma 'ongs pa yin no || gang skyes la ma shig pa de ni da ltar byung ba yin no || gang shig pa de ni 'das pa yin\* no shes bya ba 'di la mi 'grub pa ci shig yod. \*ma yin (P 282al ~2) .

自在天のなせる業である。』<sup>25)</sup>[と]。

## V 二教証・二理証批判

### V-1 第一教証批判

#### V-1-1 第一教証批判その一 (299, 1~8)

[以上のような作用批判に]対して[次に教証から批判しよう]。[有部は]「[經典に] 説かれているから」〈AK V 25a2〉[過去・未来のものは実在する]と言うが、我々も「過去・未来のものはある」とは言う。ただし、過去のものとは以前に存在したものであり、未来のものとは原因があれば生じるであろうものである。そのようにして[過去・未来のものは]あるとは言うが、実[在]する[と言う]のではない。

〈有部〉しかし、それ(過去・未来のもの)が現在のものと同様に存在する、と誰が言ったか。

〈答論〉同様でないなら、どのようにして存在するのか。

〈有部〉過去・未来のもの自体として[存在するのである]。

〈答論〉再び次のことがあなたに提示される。[即ち]もし[自体として]常に存在するなら、どうしてそれが「過ぎ去ったもの」・「未だ来ないもの」と言われるのか。

従って、以前に存在した原因は「かつてあった」ということ、これから存在するであろう結果は「これからあるであろう」ということを教えようとして、因果は[あるのに]ないとする見解を否定するために、世尊によって「過去のものはある。未来のものはある。」と説かれたのである、「ある (asti)」とい

---

25) cf. TS1801: kārītraṃ sarvadā nāsti sadā dharmas tu varṇyate | dharmān anyac ca kārītraṃ vyaktaṃ devaviceṣṭitam || 婆沙 394c5~8: 問作用与体為一為異、答不可定説為一為異、如有漏法一一体上有無常等衆多義相、不可定説為一為異。

うことばは不変化詞 (nipāta) であるからである<sup>26)</sup>。たとえば、「灯火の以前にはないことが『ある』、以後にはないことが『ある』」と言う人があり、また、「その灯は消されて『ある』が、私が消したのではない」と言う人がいるように、そのように「過去のものはある (過ぎ去って『ある』)、未来のものはある (未だ来ずに『ある』)」と言われたのである。なぜなら、さもなくば過去・未来のものの在り様そのものが成り立たなくなるからである。

#### V-1-2 第一教証批判その二 (299, 8~11)

〈有部〉それでは、ラグダシキーヤカ派 (杖髻外道) の遊行者たちに対して、世尊は、「行為は、過ぎ去り、尽き、消滅し、壊れ、変化しても、存在する。」<sup>27)</sup>と説かれたが、彼ら [杖髻外道] はその行為がかつてあったことを認めなかったのか。[否、認めていたのである]<sup>28)</sup>。

〈答論〉しかし、そ [の経典] では、それ (過去の行為) によって心の連続体 (santati) に保持された (結果を与える効力) のことを意図して、[世尊はそのように] 説かれたのである。なぜなら、[それとは] 別の仕方 [即ち] 自らの本體をもって現に存在するような過去のものなど成立するはずがないからである。

---

26) SA 473, 5~7: āsīd atītam bhaviṣyaty anāgatam iti vaktavye 'stīti vacanam. astiśabdasya nipātatvāt. trikālaviṣayo hi nipātaḥ. āsīdarthe bhaviṣyadarthe 'pi vartate.

27) 「過去の行為の結果がある」という経も有部の教証の一つと考えられるが、ここでは、「第一教証その二」としておく。しかし、趣旨は第二理証と同じである。本庄2014: 673~676 [5018] 参照。

28) 有部の主張は、「ラグダシキーヤカ派も行為が前にあったことは認めても、その本体の存在までは認めなかったので、世尊は敢えて過去の行為の現存在を説かれた」というものである。SA 473, 20: etad uktaṃ bhavati. icchanti sma te tasya karmaṇo bhūtapūrvatvaṃ. kiṃ tu na drayya iti. tasmin karmaṇi te vipratipannāḥ. nāsti tat karmābhyatītam iti. yato bhagavatā yatra te vipratipannāḥ svabhāve tat karmābhyatītam astīti vistareṇa. tasmād asti svabhāvenātītam iti vistaraḥ.

### V-1-3 第一教証批判その三 (299, 12~16)

また、世尊によって『勝義空性経』に説かれた以下のことは、このよう [に未来のものも過去のものも実在しないということ]<sup>29)</sup>なのである。[即ち]「眼が生じるとき、[眼は] どこからもやってこないし、消滅するとき、どこにも集まらない。というわけで、比丘らよ、眼は前に無くて今存在し、存在し終わって元 [の無] にもどる」<sup>30)</sup>と。もし未来の眼が [現に] 存在するなら、「前に無くて今存在する」<sup>31)</sup>とは言われなかったであろう。

また、もし「現在時において、[眼は] 前に無くて今存在する [ということである]」と [反] 論するなら、それはちがう。[現在] 時と [現在の眼という] 存在とは別のものではないからである<sup>32)</sup>。また、もし自らの本体 [である眼] について、[眼は] 前に無くて今存在する [と言う] なら、未来の眼は [今] 存在しないということが成立する<sup>33)</sup>。

### V-2 第二教証批判 (299, 16~18)

「二に依拠して認識は生じるから」と言われたことも、今ここで検討されるべきである<sup>34)</sup>。[即ち、] 意 (manas) と観念 (dharma) とに依拠して<sup>35)</sup>、意識

29) SA 474, 1~2: itthamś cāitad evam iti, yathānāgataṃ dravyato nāsty aṭītaṃ cēti.

30) この「前に無くて今存在し、存在し終わって消滅する」(本無今有)という句は有部批判の中心となっており、世親以後の刹那滅論証にもつながると考えられる。cf. TSP 631, 15~24 ad TS1850~1851等。本庄2014: 676~677 [5019] 参照。

31) AKBh 299, 14: bhūtvā na bhavati を abhūtvā bhavati と訂正。cf. D 241b5, P 283a2: gal te ma 'ongs pa'i mig cig yod par gyur na ma byung ba las 'byung ngo shes gsung par mi 'gyur ro. 真諦 258c29~259a1: 若未来眼根是有則無此説、謂未有有等。玄奘 卷二十の六右: 未来眼根若実有者、経不应説本無等言。

32) cf. SA 474, 2~8.

33) cf. TSP 632, 9~11.

34) cf. TSP 630, 16~18.

35) AKBh 299, 17: dharmas̄ を dharmam̄s̄ と訂正。cf. P 283a4, D241b7: yid dang chos rnams la brten nas̄...

(manovijñāna) は生じるが、意は<sup>36)</sup>それ(意識)を生じさせる原因(pratyaya)であるように、観念も「意識を生じさせる原因として実在するの」か、それとも観念はただ「意識の」対象としてあるだけなのか。

#### V-2-1 第二教証批判その一 (299, 18~20)

まず、もし諸々の観念は「意識を」生じさせる原因[として実在するもの]であるなら、「いつでもその意識は生じるはずであるが、」未来にあって干劫の後に生じてくるか、または「生じ」ないかもしれないような「観念」が、今、どのようにして認識を生じさせるのか。また、涅槃はあらゆる生起の消滅であるから<sup>37)</sup>、「認識を」生じさせる「原因となる」はずがない。

#### V-2-2 第二教証批判その二 (299, 20~25)

また、もし観念は「意識の」対象としてあるだけなら、「過去・未来のものも認識対象である」と我々も言う。

〈有部〉もし「過去・未来のものが実在し」ないなら、「過去・未来のものは」どのようにして対象であるのか。

〈答論〉これに対し今や我々は答えよう。「その「過去・未来のもの」が対象であるとき、そのあるがままに「対象」である<sup>38)</sup>。それはどのようにして対象であるか[と云えば、「あった」・「あるだろう」と「いうようにであると答えよう」。なぜなら、過去の物質的存在や感受[等]を思い出すとき、誰も「今

---

36) AKBh 299, 17~18: mano-janakah を mano janakah と訂正。P 283a4, D241b7: ji ltar yid skyed par byed pa'i rkyen yin pa de (P omits de) ltar... 真諦 267a5~6: 依意根縁法塵是所生意識、為如意根於此識作生縁法塵亦爾、為但作所縁境。玄奘 卷二十の六右: 意法為縁生意識者、為法如意作能生縁、為法但能作所縁境。

37) cf. SA 474, 14~15.

38) AKBh 299, 21: yadā を yathā と訂正。P 283a8, D242a3: ji ltar na dmigs pa yin pa de ltar... 真諦 259a11: 如成境界如此有。玄奘 卷二十の六右~七左: 彼有如成所縁。

ある」とは考えないのであって、「あった」と「考えるのである」から、あたかも現在の物質的存在が経験されるごとくに、その過去の「物質的存在」が思い出されるからである。そして、未来のものが現在のものとなるであろう、というように認識 (buddhi)<sup>39)</sup>によってとらえられる。もしその「未来のもの」が全く「現在のもの」のようにあるなら、現在であるということとなる。また、もし「現在のもの」で「実」在しないものも対象となるということが成立する。

### V-2-3 第二教証批判その三 (299, 25~300, 6)

それ(過去・未来のもの)は、それ(現在のもの)が散乱しているのである、と言うならば、そうではない。散乱したものは捉えられないからである。もしそれぞれの物質的存在は、「過去・未来時には、」ただ原子に分解しているだけなら、原子は恒常であるということになり、また、原子の集積と分解だけがあるということになる。しかし「そうすると」「何も生起せず消滅もしない」というアーージーヴィカ(邪命外道)の説に依拠していることになる。また、「眼は、生じるときどこからも生じない」<sup>40)</sup>云々という「先述の」経典が無視されていることになる。

「また、」原子の集まりでない感受等に、どうして散乱性があるか。それら「感受等」も、「過去のものの場合、」あたかも「現在」生じているものが経験されるかのように、思い出されるのである。もし「過去のもの」が思い出される時、「それら「感受等」は、全く「現在のものと同じ」ままで存在するなら、恒常であるということになる。また、もしそうでないなら、「実」在しないものも認識の対象となる、ということが成立する。

39) AKBh 299, 24: buddhyā をチベット訳と真諦訳は「諸仏の智」とする。P 283b2, D242a4: sangs rgyas rnam kyis mkhyen to. 真諦 259, 15: 諸仏如来見彼亦爾。

40) 本節 V-1-3 参照。

#### V-2-4 第二教証批判その四 (300, 6~12)

〈有部〉もし〔実〕在しないものも認識の対象となるなら、第十三処も〔認識の対象に〕なってしまう。

〈答論〉では、「第十三処はない」というこの認識の対象は何か。

〈有部〉〔第十三処という〕この名弥こそが対象である<sup>41)</sup>。

〈答論〉それなら、「名称は存在しない」と理解されることになろう。また、「音声は以前にはない」ということを対象とする人にとって、対象は何か。

〈有郎〉音声こそが〔対象である〕。

〈答論〉それなら、音声はないことを望む人に、音声が発せられることになろう。

「〔音声は以前にはない〕と言うときには〕未来の位置にある〔音声を対象である〕〕と言うなら、〔貴方達は「未来のものは存在する」と言うのだから<sup>42)</sup>、その〕存在する〔音声〕に対して「ない」という認識がどうして起こるのか。「現在の〔音声〕はない」と言うなら、それはおかしい。〔貴方達にとって、未来の音声と現在のそれとは本性としては〕同一だからである<sup>43)</sup>。あるいは、その〔音声に〕特殊性が〔生じると言う〕とき<sup>44)</sup>、そ〔の特殊性〕は〔以前には〕存在しないで〔今〕存在するということが成立する。従って、認識の対象は、存在するものと存在しないものとの二者である。

#### V-2-5 第二教証批判その五 (300, 12~18)

〈有部〉では、〔釈迦牟尼〕菩薩が「この世にないものを私は、知ったり見た

41) SA 475, 15~16: etad eva nāmēti Vaibhāṣikāḥ. yad etan nāma trayodaśam āyatanam iti tad ālambanam.

42) SA 475, 25: vidyāne tasminñ śabde… 玄奘 卷二十の七右: 未来実有如何謂無。

43) SA 475, 27~28: na. ekatvāt. yad eva tad anāgatam tad eva vartamānam bhavati. na tasmād anyad iti.

44) AKBh 300, 11: yāvatā を yo vā と訂正。P 284a2, D242b3: yang na de'i bye brag gang yin pa de… SA 475, 29: yo vā tasya viśeṣaḥ.

りするようなことはありえない。』<sup>45)</sup>と言われた [のであるから、存在しないものを対象とする認識はない]。

〈答論〉「他の人々は増上慢をもっていて、存在しない光明 (avabhāsa)<sup>46)</sup>さえも存在すると見る。しかし、私は、存在するものだけを存在すると見る」ということが、そ [の経典] における趣旨である。もしそうではなくて、すべての認識が存在するものを対象とするなら、かの [菩薩] にどうして [「世間がないもの」云々という] 思案があるのか<sup>47)</sup>、あるいは、[菩薩とそうでない者達とに] どんな違いがあるのか<sup>48)</sup>。また、世尊によって別の [経典] に次のように説かれたことは、そのよう [に認識は存在するものと存在しないものを対象とするということ]<sup>49)</sup>なのである。[即ち]「私の声聞弟子たる比丘は来るがよい<sup>50)</sup>……かの [声聞弟子] は、夜明けに<sup>51)</sup>私によって教えられたなら、夕べにすぐれたものとなるであろう。夕べに教えられたなら、夜明けにすぐれたものとなるであろう。あるものをあると知り、ないものをないと [知り]、普通のものを普通と知り、最高のものを最高のものと [知る] であろう」<sup>52)</sup>と。

45) これも教証の一つと考えられるが、「第二教証その二」としておく。本庄2014: 677~679 [5020] 参照。

46) 本庄2014: 677~679 [5020] 参照。

47) cf. SA 476, 7~10.

48) Yaśomitra は、SA 476, 10~12で、「菩薩とそうでない者との違いを、その識の対象が存在するものと存在しないものであるか、存在するものだけであるかに依る」とする。

49) SA 476, 12~13: itthaṃś cāitad evaṃ sadasadālambanā buddhaya iti.

50) AKBh 300, 16: etad bhikṣur を etu bhikṣur と訂正。P 284a5, D242b6: nga'i nyan thos kyi dge slong tshur shog bya ba nas de ngas de ngas nang gtams na nub kyhad par du 'gro | 真諦 159b11~13: 善来比丘為我弟子、若我朝教汝…朝至証勝得。本庄2014: 679~683 [5021] 参照。

51) AKBh 300, 17: kalpaṃ…kalpaṃ を kālyam…kālyam と訂正。なお、プラタンは写本では kālpa であるとする (AKBh 300, n.12)。

52) 本庄2014b: 679~683 [5021] 参照。

### V-3 第一理証批判 (300, 18~19)

従って、「認識は [実] 在するものを対象とするから<sup>53)</sup>」ということも理由にならない<sup>54)</sup>。

### V-4 第二理証批判 (300, 19)

「[行為の] 結果 [がある] から」<sup>55)</sup>と言われたことも [三世実有の理由にはならない]。

#### V-4-1 第二理証批判その一 (300, 19~21)

実際、経量部は「過去の行為から [直接] 結果が生じる」とは言わない。そうではなくて、それ [過去の行為] を件う特殊な心の流れから [結果が生じると言う]。そのことは、有我論否定 [の章 = 「破我品」] で説明しよう。

#### V-4-2 第二理証批判その二 (300, 21~301, 6)

他方、過去・未来のものは実在する [と主張する] 者にとって、結果は恒常であるから、その場合、行為にどんな能力があるというのか<sup>56)</sup>。

〈有部〉[結果を] 生起させる能力がある。

〈答論〉その場合、[結果の] 〈生起〉 (utpāda) は前に無くて今存在する、ということが成立することになる<sup>57)</sup>。また、もし [三時の] すべてのものが存在するなら、何の、何に対する能力があるのか<sup>58)</sup>。以下のようなヴァールシャガ

---

53) cf. AK V 25b<sub>2</sub>; TSP 630, 19~631, 12 ad TS1847~1848.

54) cf. SA 476, 15~16: tasmād ayam apy ahetur iti. yad etad bodhisattvenōktam iti.

55) cf. AK V 25b<sub>3</sub>; TSP 631, 13~14 ad TS1849.

56) cf. TSP 629, 8~10.

57) cf. TSP 629, 10~11.

58) cf. TSP 629, 11~12.

ニヤ(雨衆外道)<sup>59)</sup>の説が「あなたによって」示唆されている「にすぎない。即ち」「存在するものは必ず存在する。存在しないものは決して存在しない。存在しないものが生起することはない。存在するものが消滅することはない」と。

〈有部〉それなら、「現在のものにする能力がある」[と答えよう]。

〈答論〉この「現在のものにする」とはどういうことなのか。「[[原因が結果を]別の場所に引くことである]」と言うなら、「結果は]恒常であることになろう<sup>60)</sup>。また、非物質的な[感受など]に、どうしてそれ(=別な場所に引くこと)があるのか<sup>61)</sup>。しかも、[別な場所に]引く[という働き]は前に無くて今存在するものである<sup>62)</sup>。[また、]「[[原因によって結果の]本性が区別される]<sup>63)</sup>と言うなら、前に無くて今存在することが成立する。従って、以上のように、「過去・未来のものは実在すると説く]説一切有部はその教説に関して正しくない。

## VI 結び (301, 6~11)

しかし、経典に説かれているように「すべてがある」と言えば、正しい。経典にはどのように「すべてがある」と説かれているか。「バラモンよ、すべてがあるとは、十二処すべてが[あるということ]である」<sup>64)</sup>と「説かれているのである」。あるいはまた、三時も説かれたが、その「三時」がある通りに説かれたのである<sup>65)</sup>。

〈有部〉では、過去・未来のものがないとき、それ(過去・未来の事物)に関してそれ(過去・未来の煩惱)とどのように結びつくのか<sup>66)</sup>。

59) サーンキヤ派の古師。

60) cf. SA 476, 25~27.

61) cf. SA 476, 27~29.

62) cf. TSP 629, 12~15.

63) SA 476, 30~32.

64) 本庄2014: 683~685 [5022] 参照。

65) SA 477, 2~4.

66) cf. AKBh 295, 3~4.

〈答論〉それ（過去の煩惱）から生じそれ（未来の煩惱）の原因となるような随眠（*anuśaya* = *bīja*）があるから、〔過去・未来の〕煩惱と〔結びつくのであり〕、それ（過去・未来の事物）を対象とする煩惱の随眠があるから、〔過去・未来の〕事物に結びつくのである<sup>67)</sup>。しかし、ヴァイバーシカ派は、「過去・未来のものは必ず存在する」と言う。〔論理によって〕導くことができないことに関しては、自愛によって<sup>68)</sup>次のように教示することになる。

実に、ものの本来のあり方（*dharmatā* 法性）は深遠である。|| 27d ||

〔深遠とは〕必ずしも論理によって証明されない<sup>69)</sup>〔ということである〕。

〔同義であっても、違う〕説き方がある<sup>70)</sup>。〔即ち〕生じるものが消滅する。〔たとえば、〕もの（A）が生じ、〔その同じ〕もの（A）が消滅する〔というように〕。あるものが生じ、別なものが消滅する、という説き方がある。〔たとえば、〕未来のものが生じ、現在のものが消滅する。〔また、〕時間も生じる〔と言える〕。生じてくるものは、時間に含まれているからである。時間からも生じる〔と言

67) SA 477, 4~11. 有部は、過去・未来の実有に固執し因果關係をすべて過・未の実有によって説明する故に、潜在・顕在を持ち出す必然性がないのに対して、経量部は、過去の実有を否定する故に、*anuśaya* をその本来の意味即ち *bīja*（種子）の意味に用いる。この点が有部と経量部を分か一つ一つの大きな特徴と言えよう。cf. Jaini1959b. なお、AKBh 301, 9~10: *tadālaṃbane kleśānuśayabhāvād* を *tadālaṃbanakleśānuśaya-bhāvād* と訂正。cf. SA 477, 10: *tadālaṃbanaḥ kleśaḥ tasyānuśayaḥ tasya bhāvā...*; P 284b8, D243a7: *de la dmigs pa'i nyon mongs pa'i phra rgyas yod pas...*; 真諦 259c6~7: 縁彼為境惑随眠眼生故。

68) AKBh 301, 10~11: *yatra netum śakyate tatrātmakātmanāivaṃ* を *yan na netum śakyate tatrātmakāmenāivaṃ* と訂正。cf. D 243a7, P 285a1: *gang shig drang bar mi nus pa de la ni 'di ltar*. 但し、チベット語訳は、*ātmakāmenāiva* の句を欠く。真諦 259c8~10: (若義証此聖言可得了達、自愛人於中必応信受。) 若不爾、自愛人於中…。玄奘 卷二十の九左: 所有於中不能通釈、諸自愛者…。

69) AKBh 301, 13: *tarhy asādhya* を *tarkasādhya* と訂正。D243b, P 185a1~2: *gdon mi za bar rtog pas sgrub pa ma yin no...* 真諦 259, 10~11: 非必定由自思量之所解。玄奘 卷二十の九左: 非尋思境。

70) cf. 婆沙 394c9~10; c16~17: 問為此法生即此法滅、為法生余法滅耶…; 問諸有為法未來生時、為世体生、為世中生…。

える]。未来時には多くの瞬間があるからである。

[本論に] 付随して入った [議論] が終わった。

第2節 校訂テキスト AKBh 295, 2 ~301, 16 ad AK V 25~27.<sup>71)</sup>

I 序 (295, 2 ~ 5)

kiṃ punar idam atītānāgatam dravyato<sup>72)</sup> 'sty atha na | yady asti sarva-  
kālāstitvāt saṃskārāṇām śāśvatatvaṃ prāpnoti | atha nāsti | katham tatra tena  
vā saṃyukto bhavati viṣaṃyukto vā | na saṃskārāṇām śāśvatatvaṃ  
pratijñāyate Vaibhāṣikaiḥ saṃskṛtalakṣaṇayogāt |

II 三世実有説 (295, 5 ~ 6)

pratijñāyate tu viśadam  
sarakālāstitā | 25a<sub>1</sub> |

II - 1 第一教証 (295, 7 ~12)

kiṃ kāraṇam |  
uktatvāt | 25a<sub>2</sub> |

uktaṃ hi bhagavatā “atītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nābhaviṣyan na śrutavān  
āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat | yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ  
tasmāc chrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavati | anāgataṃ ced  
rūpaṃ nābhaviṣyat na śrutavān āryaśrāvako 'nāgataṃ rūpaṃ nābhyanandiṣyat |  
yasmāt tarhy asty anāgataṃ rūpaṃ” iti vistaraḥ |

71) AKBh 1975: 295, 2~301, 18.

72) AKBh 295, 2: -nāgatam ucyate を -nāgataṃ dravyato と訂正。cf. D 239a2: ci 'das  
pa dang ma 'ongs pa'i dngos po rdzas su yod 'on te med., P 279b5: ...ma  
'ongs pa 'di rdzas su yod 'on te med; 真諦 257b29: 過去未來為実有物為假名  
有; 玄奘 (卷二十の一左): 応弁諸事過去未來、為実有無方可説繫。

II - 2 第二教証 (295, 13~16)

**dvayāt | 25b<sub>1</sub> |**

"dvayaṃ pratītya vijñānasyôtpāda" ity uktam | dvayaṃ katamat | cakṣū  
rūpāṇi yāvat mano dharmā iti | asati vā 'tītānāgate tadālabanaṃ vijñānaṃ  
dvayaṃ pratītya na syāt |

evaṃ tāvad āgamato 'sti atītānāgataṃ |

II - 3 (295, 16~19)

yuktito 'pi |

**sadviṣayāt | 25b<sub>2</sub> |**

sati viṣaye vijñānaṃ pravartate nāsati | yadi cātītānāgataṃ na syād asad-  
ālabanaṃ vijñānaṃ syāt | tato vijñānaṃ eva na syād ālabanaḥbhāvāt |

II - 4 (295, 20~296, 1)

**phalāt / | 25b<sub>3</sub> |**

yadi cātītaṃ na syāt śubhāśubhasya karmaṇaḥ phalam āyatyāṃ kathaṃ  
syāt | na hi phalotpattikāle varttamāno vipākahetur astīti | tasmād asty  
evātītānāgataṃ iti Vaibhāṣikāḥ |

II - 5 (296, 1 ~ 6)

avaśyaṃ ca kilāitat sarvāstivādena satā 'bhyupagantavyam | yasmāt

**tadastivādāt Sarvāstivādā iṣṭāḥ | 25cd<sub>1</sub> |**

ye hi sarvam astīti vadanti atītam anāgataṃ pratyutpannaṃ ca te Sarvāstivādāḥ |  
ye tu kecid asti yat pratyutpannam adattaphalaṃ cātītaṃ karma kiṃcin  
nāsti yad dattaphalam atītam anāgataṃ ceti vibhajya vadanti te Vibhajyavādināḥ |

III (296, 6 ~ 8)

kati câite sarvâstivādā ity āha

caturvidhāḥ || 25d<sub>2</sub> ||

te bhāvalakṣaṇāvasthā 'nyathānyathikasamjñitāḥ | 26ab |

III – 1

III – 1 – 1 (296, 9 ~14)

bhāvānyathiko bhadanta-Dharmatrātaḥ | sa kilāha | dharmasyādhusu, pravartamānasya bhāvānyathātvaṃ bhavati na dravyānyathātvaṃ | yathā suvarṇabhājanasya bhittvā 'nyathā kriyamāṇasya samsthānānyathātvaṃ bhavati na varṇānyathātvaṃ | yathā ca kṣīraṃ dadhitvena pariṇamad rasavīryavipākān parityajati na varṇam | evaṃ dharmo 'py anāgatād adhvanaḥ pratyutpannam adhvānam āgacchann anāgatabhāvaṃ jahāti na dravyabhāvam | evaṃ pratyutpannād atītam adhvānaṃ gacchan pratyutpannabhāvaṃ jahāti na dravyabhāvam iti |

III – 1 – 2 (296, 15~18)

lakṣaṇānyathiko bhadanta-Ghoṣakaḥ | sa kilāha | dharmo 'dhvasu prava-rtamāno 'tīto 'tītalakṣaṇayukto 'nāgatapratyutpannābhyāṃ lakṣaṇābhyāṃ aviyuktaḥ | anāgato 'nāgatalakṣaṇayukto 'tītapratyutpannābhyāṃ aviyuktaḥ | evaṃ pratyutpanno 'py atītānāgatābhyāṃ aviyuktaḥ | tad yathā puruṣa ekasyāṃ striyāṃ raktaḥ śeṣāsv avirakta iti |

III – 1 – 3 (295, 19~21)

avasthānyathiko bhadanta-Vasumitraḥ | sa kilāha | dharmo 'dhvasu prava-rtamāno 'vasthām avasthām prāpyānyo'nyo nirdiśyate avasthāntarato na dravyāntarataḥ | yathāikā vartikā ekāṅke nikṣiptā ekam ity ucyate śatāṅke

śataṃ sahasrāṅke sahasram iti |

Ⅲ－１－４ (297, 1～3)

[297] anyathānyathiko bhadanta-Buddhadevaḥ | sa kilāha | dharmo 'dhvasu pravartamānaḥ pūrvāparam apeksyānyo'nya ucyate<sup>73)</sup> | yathāikā strī mātā vōcyate duhitā vēti | ity ete catvāraḥ sarvāstivādāḥ |

Ⅲ－２

Ⅲ－２－１ (297, 4)

eṣāṃ tu prathamāḥ pariṇāmapāditvāt sām̐khyapakṣe nikṣeptavyaḥ |

Ⅲ－２－２ (297, 4～6)

dvitīyasyād̐hvasaṃkaraḥ prāpnoti | sarvasya sarvalakṣaṇayogāt<sup>74)</sup> | puruṣasya tu kasyāṃcit striyāṃ rāgaḥ samudācarati kasyāṃcit kevalaṃ samanvāgama iti kim atra sām̐yam |

Ⅲ－２－３ (297, 6～8)

caturthasyāpy ekasminn evādhvani trayo 'dhvānaḥ prāpnuvanti | atīte 'dhvani pūrvapaścimau kṣaṇāv atītānāgatau madhyamaḥ kṣaṇaḥ pratyutpanna

73) この直後の“avasthāntarato (na\*) dravyāntarataḥ”の句は、D 240a4～5, P 281b3～5及び真諦 258a17～24、玄奘（卷二十の三右～四左）に相当句がないことから削除する。\*“na”は写本にないがプラダンは挿入している（297 n. 2）。但し、婆沙 396b4に「体雖無別由待有異」とあり、また、Frauwallner（1973: 99, 30～31 & n. 10）は、nāvasthāntarato na dravyāntarataḥとする。この句を生かすとすれば、称友註を採ってもよい。cf. SA 470, 19: pūrvāparāpekṣayā na dravyāntarataḥ.

74) AKBh 297, 5: sarvalakṣaṇayogātのkṣaṇaをlakṣaṇaと訂正。cf. D 240a5～6, P 281a5～6: tham cad la mtshan nyid tham cad dang ldan pa'i phyir | 真諦 258a22: 一切世与一切相相应故；玄奘 卷二十の四左：三世皆有三世相故。

iti | evam anāgate 'pi |

III – 2 – 4 (297, 8 ~10)

ata eṣāṃ sarveṣāṃ

**ṛṭīyaḥ śobhanaḥ | 26c<sub>1</sub> |**

yo 'yam avasthānyathikaḥ |

III – 2 – 5 (297, 10~13)

tasya kila

**adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitāḥ || 26c<sub>2</sub>d ||**

yadā sa dharmāḥ kāritraṃ na karoti tadānāgataḥ | yadā karoti tadā pratyut-  
pannaḥ | yadā kṛtvā niruddhas tadātīta iti, parigatam etat sarvam |

IV

IV – 1 (297, 13~17)

idaṃ tu vaktavyam | yady aṭītam api dravyato 'sty anāgatam iti | kasmāt  
tad aṭītam ity ucyate 'nāgatam iti vā |

nanu cōktam adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitā iti |

yady evaṃ pratyutpannasya tatsabhāgasya cakṣuṣaḥ kiṃ kāritram |  
phaladānapratigrahaṇam |

aṭītānām api tarhi sabhāgahetvādīnām phaladānāt kāritraprasaṅgo 'rdha-  
kāritrasya vēti lakṣaṇasaṃkaraḥ |

IV – 2 (297, 17~20)

idaṃ ca vaktavyam | tenāivātmanā sato dharmasya nityaṃ kāritrakaraṇe

**kiṃ vighnaṃ | 27a<sub>1</sub> |sa**

yena kadācit kāritraṃ karoti kadācin nēti | pratyayānām asāmagryam iti

cet | na | nityam astitvābhyupagamāt |

IV – 3 (297, 20~298, 3)

yac ca tat kārītram atītam anāgataṃ pratyutpannaṃ cōcyate

**tat katham | 27a<sub>2</sub> |**

[298] kiṃ kārītrasyāpy anyad asti kārītram | atha tan nāivātītam nāpy  
anāgataṃ na pratyutpannam asti ca | tenāsaṃskṛtatvān nityam astīti prāptam |  
ato na vaktavyaṃ yadā kārītraṃ na karoti dharmas tadānāgata iti |

IV – 4

IV – 4 – 1 (298, 4 ~10)

syād eṣa doṣo yadi dharmāt kārītram anyat syāt | tat tu khalu

**nānyat | 27a<sub>3</sub> |**

ato na bhavaty eṣa doṣaḥ |

evaṃ tarhi sa eva

**adhvāyogaḥ | 27b<sub>1</sub> |**

yadi dharma eva kārītraṃ kasmāt sa eva dharmas tenāivātmanā  
vidyamānaḥ kadācid atīta ity ucyate kadācid anāgata ity adhvanām vyavasthā  
na sidhyati | kim atra na sidhyati | yo hy ajāto dharmāḥ so 'nāgataḥ | yo jāto  
bhavati na ca vinaṣṭaḥ sa vartamānaḥ | yo vinaṣṭaḥ so 'tīta iti |

IV – 4 – 2 (298, 10~22)

etad evātra vaktavyam | yadi yathā vartamānaṃ dravyato 'sti tathātītam  
anāgataṃ cāsti | tasya

**tathā sataḥ | 27b<sub>2</sub> |**

**ajātanaṣṭatā kena | 27c |**

tenāiva svabhāvena sato dharmasya katham idaṃ sidhyaty ajāta iti yo

vinaṣṭa iti vēti | kim asya pūrvam nâsîd yasyâbhāvād ajāta ity ucyate | kiṃ ca paścân nâsti yasyâbhāvād vinaṣṭa ity ucyate | tasmân na sidhyati sarvathâpy atrâdhvatrayam | yady abhūtvā bhavatîti nêṣyate bhūtvā ca punar na bhavatîti | yad apy uktam "saṃskṛtalakṣaṇayogân na śâsvatatvaprasaṅga" iti | tad idaṃ kevalam vânmâtram utpâdavinâśayor ayogât | nityam ca nâmâsti sa dharmo na ca nitya ity apūrvâiṣâ vâcoyuktiḥ | âha khalv api svabhâvah sarvadâ câsti bhâvo nityaś ca nêṣyate | na ca svabhāvād bhâvo 'nyo vyaktam Īsvaraçeṣṭitam ||

V

V – 1

V – 1 – 1 (299, 1 ~ 8)

[299] yat tûktam uktatvād (25a<sub>2</sub>) iti | vayam api brūmo 'sty atītānāgatam iti | atītam tu yad bhūtapūrvam | anāgatam yat sati hetau bhaviṣyati | evam ca kṛtvā 'stīty ucyate na tu punar dravyataḥ |

kaś câivam âha | vartamānavat tad astīti |

katham anyathâsti |

atītānāgatātmanā |

idaṃ punas tavôpasthitam | katham tad atītam anāgatam côcyate yadi nityam astīti |

tasmât bhūtapūrvasya ca hetor bhāvinaś ca phalasya bhūtapūrvatām bhāvitām ca jñāpayitum hetuphalāpavādadrṣṭipratīṣedhārtham uktam Bhagavatā "asty atītam asty anāgatam" iti | astīśabdasya nipātatvāt | yathâsti dīpasya prāgabhâvo 'sti paścādabhâva iti vaktâro bhavanti yathâ câsti niruddhaḥ sa dīpo na tu mayā nirodhita iti | evam atītānāgatam apy astīty uktam | anyathâ hy atītānāgatabhâva eva na sidhyet |

V – 1 – 2 (299, 8 ~11)

yat tarhi Laguḍasikhīyakān parivrājakān adhikṛtyôktaṃ Bhagavatā "yat karmābhyatītaṃ kṣīṇaṃ niruddhaṃ vigataṃ vipariṇataṃ tad astīti | kiṃ te tasya tasya karmaṇo bhūtapūrvatvaṃ nêcchanti sma |

tatra punas tadāhitaṃ tasyāṃ saṃtatau phaladānasāmarthyāṃ saṃdhāyôktaṃ | anyathā hi svena bhāvena vidyamānam atītaṃ na sidhyet |

V – 1 – 3 (299, 12~16)

itthaṃ cāitad evaṃ yat Paramārthaśūnyatāyāṃ uktaṃ Bhagavatā "cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati | iti hi bhikṣavaś cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca pratigacchatīti | yadi cānāgataṃ cakṣuḥ syān nōktaṃ syād abhūtvā bhavatīti<sup>75)</sup> |

varttamāne 'dhvany abhūtvā bhavatīti cet | na | adhvano bhāvād anarthāntaravāt | atha svātmany abhūtvā bhavati | siddham idam anāgataṃ cakṣur nāstīti |

V – 2 (299, 16~18)

yad apy uktaṃ "dvayaṃ pratītya vijñānasyôtpādād" itīdaṃ tāvad iha saṃpradhāryam | yan manaḥ pratītya dharmamś<sup>76)</sup> cōtpadyate mano-vijñānaṃ kiṃ tasya yathā mano janakaḥ<sup>77)</sup> pratyaya evaṃ dharmā āhosvid

75) AKBh 299, 14: bhūtvā na bhavati を abhūtvā bhavati と訂正。cf. D 241b5, P 283a2: gal te ma 'ongs pa'i mig cig yod par gyur na ma byung ba las 'byung ngo shes gsung par mi 'gyur ro | 真諦 258c29~259a1: 若未来眼根是有則無此説、謂未有有等。玄奘 卷二十の六右: 未来眼根若実有者、經不應説本無等言。

76) AKBh 299, 17: dharmas を dharmamś と訂正。cf. P 283a4, D241b7: yid dang chos rnam la brten nas...

77) AKBh 299, 17~18: mano-janakaḥ を mano janakaḥ と訂正。P 283a4, D241b7 : ji ltar yid skyed par byed pa'i rkyen yin pa de (P omits de) ltar... 真諦 267a5 ~6: 依意根縁法塵是所生意識、為如意根於此識作生縁法塵亦爾、為但作所縁境。玄奘 卷二十の六右: 意法為縁生意識者、為法如意作能生縁、為法但能作所縁境。

ālambanamātram dharmā iti |

V – 2 – 1 (299, 18~20)

yadi tāvat janakaḥ pratyayo dharmāḥ katham yad anāgatam kalpasahasreṇa bhaviṣyati vā na vā tad idānīm vijñānam janayisyati | nirvāṇam ca sarvapravṛttinirodhāj janakam nōpapadyate |

V – 2 – 2 (299, 20~25)

athālambanamātram dharmā bhavanti atītānāgatam apy ālambanam bhavatīti brūmah |

yadi nāsti katham ālambanam |

atrédānīm brūmah | yathā<sup>78)</sup> tadālambanam tathāsti | katham tadālambanam abhūd bhaviṣyati cēti | na hi kaścid atītam rūpaṃ vedanām vā smarann astīti paśyati | kiṃ tarhi | abhūd iti | yathā khalv api varttamānam rūpaṃ anubhūtam tathā tad atītam smaryate | yathā cānāgatam varttamānam bhaviṣyati tathā buddhyā gṛhyate | yadi ca tat tathāivāsti varttamānam prāpnoti | atha nāsti | asad apy ālambanam bhavatīti siddham |

V – 2 – 3 (299, 25~300, 6)

tad eva tadvikīrṇam iti cet | [300] na | vikīrṇasyāgrahaṇāt | yadi ca tat tad eva rūpaṃ kevalam paramāṇuśo vibhaktam | evaṃ sati paramāṇavo nityāḥ prāpnuvanti | paramāṇusamcayavibhāgamātram cāivaṃ sati prāpnoti | na tu kiṃcid utpadyate nāpi nirudhyata ity Ājīvikavāda ālambito bhavati | sūtram cāpavidham bhavati "cakṣur utpadyamānam na kutaścid āgacchati" iti

---

78) AKBh 299, 21: yadā を yathā と訂正。P 283a8, D242a3: ji ltar na dmigs pa yin pa de ltar... 真諦 259a11: 如成境界如此有。玄奘 卷二十の六右～七左: 彼有如成所縁。

vistarahaḥ |

aparamāṇusamcitānāṃ vedanādīnāṃ kathaṃ vikīrṇatvam | te 'pi ca yathôtpannānubhūtāḥ smaryante | yadi ca te tathāiva santi nityāḥ prāpnuvanti | atha na santi | asad apy ālambanam iti siddham |

V – 2 – 4 (300, 6 ~12)

yady asad apy ālambanam syāt trayodaśam apy āyatanam syāt |  
atha trayodaśam āyatanam nâstīty asya vijñānasya kim ālambanam |  
etad eva nāmālambanam |

evam tarhi nāmāiva nâstīti pratīyeta | yaś ca śabdasya prāgabdhāvam  
ālambate kiṃ tasyālambanam |

śabda eva |

evam tarhi yaḥ śabdābhāvam prārthayate tasya śabda eva kartavyaḥ syāt |  
anāgatāvastha iti cet | sati kathaṃ nâstibuddhiḥ | vartamāno nâstīti cet | na |  
ekatvāt | yo vā<sup>79)</sup> tasya viśeṣas tasyābhūtvābhāvasiddhiḥ | tasmād ubhayaṃ  
vijñānasyālambanam bhāvaś câbhāvaś ca |

V – 2 – 5 (300, 12~18)

yat tarhi Bodhisattvenôktam "yat uta loke nâsti tad ahaṃ jñāsyāmi vā  
drakṣyāmi vā nêdam sthānam vidyata" iti |

apare ābhimānikā bhavanty asantam apy avabhāsam santam paśyanti |  
ahaṃ tu santam evâstīti paśyāmīty ayaṃ tatrābhiprāyaḥ | itarathā hi  
sarvabuddhīnāṃ sadālambanatve kuto 'sya vimarśaḥ syāt ko vā viśeṣaḥ |

itthaṃ câitad evam yad anyatra Bhagavatôktam "etu bhikṣur mama śrāvako

79) AKBh 300, 11: yāvataḥ を yo vā と訂正。P 284a2, D242b3: yang na de'i bye  
brag gang yin pa de…。SA 475, 29: yo vā tasya viśeṣaḥ.

yāvat sa mayā kālyam<sup>80)</sup> avoditaḥ sāyaṃ viśeṣāya paraiṣyati | sāyam avoditaḥ  
kālyam<sup>81)</sup> viśeṣāya paraiṣyati | sac ca sato jñāsyati asac cāsataḥ sottaraṃ ca  
sottarataḥ anuttaraṃ cānuttarata" iti |

V – 3 (300, 18~19)

tasmād ayam apy ahetuḥ | sadālabhanatvād vijñānasyēti |

V – 4 (300, 19)

yad apy uktaṃ phalād <25b 3 > iti |

V – 4 – 1 (300, 19~21)

nāiva hi sautrāntikā atītāt karmaṇaḥ phalotpattiṃ varṇayanti | kiṃ tarhi |  
tatpūrvakāt samtānaviśeṣād ity Ātmavādapratīṣedhe sampravedayiṣyāmaḥ |

V – 4 – 2 (300, 21~301, 6)

yasya tv atītānāgataṃ dravyato 'sti tasya phalaṃ nityam evāstīti kiṃ tatra  
karmaṇaḥ sāmārthyam |

utpādane sāmārthyam |

utpādas tarhy abhūtvā bhavatīti siddham | [301] atha sarvam eva cāsti |  
kasyédānīm kva sāmārthyam | Vārṣagaṇyavādaś cāivaṃ dyotito bhavati |  
"yad asty asty eva tat | yan nāsti nāsty eva tat | asato nāsti sambhavaḥ | sato  
nāsti vināśa" iti |

vartamānīkaraṇe tarhi sāmārthyam |

kim idaṃ varttamānīkaraṇaṃ nāma | deśāntarākaraṇaṃ cet | nityaṃ pra

---

80) AKBh 300, 17 : kalpaṃ を kālyam と訂正。

81) AKBh 300, 17 : kalpaṃ を kālyam と訂正。なお、ブラダンは写本では kālpa  
であるとする (AKBh 300, n. 12)。

saktam | arūpiṇaṃ ca kathaṃ tat | yac ca tad ākarṣaṇaṃ tad abhūtvābhūtam |  
svabhāvaviśeṣaṇaṃ cet siddham abhūtvābhavanam | tasmān nāivaṃ  
sarvāstivādaḥ śāsane sādhur bhavati | yad atītānāgataṃ dravyato 'stīti vadati |

VI (301, 6 ~16)

evaṃ tu sādhur bhavati | yathā sūtre sarvam astīty uktam tathā vadati |  
kathaṃ ca sūtre sarvam astīty uktam | "sarvam astīti brāhmaṇa yāvad eva  
dvādaśāyatanāni" iti | adhvatrayaṃ vā | yathā tu tad asti tathōktaṃ |

athāsaty atītānāgate kathaṃ tena tasmin vā saṃyukto bhavati |

tajjataddhetvanuśayabhāvāt kleśena tadālambanakleśānuśayabhāvād<sup>82)</sup>  
vastuni saṃyukto bhavati | asty eva tv atītānāgataṃ iti Vaibhāṣikāḥ | yan na  
netum śakyate tatrātmakāmenāivaṃ<sup>83)</sup> veditavyam |

**gambhīrā khalu dharmatā | 27d |**

nāvaśyaṃ tarkasādhyā<sup>84)</sup> bhavatīti |

asti paryāyo yad utpadyate tan nirudhyate | rūpaṃ utpadyate rūpaṃ nirudhya-  
te | asti paryāyo 'nyad utpadyate 'nyan nirudhyate | anāgataṃ utpadyate vart-  
tamānaṃ nirudhyate | adhvāpy utpadyate | utpadyamānasyādhdvasaṃgrhītavāt |

82) AKBh 301, 9~10: tadālambane kleśānuśayabhāvād を tadālambanakleśānuśaya-  
bhāvād と訂正。cf. SA 477, 10 : tadālambanaḥ kleśaḥ tasyānuśayaḥ tasya bhāvā... ;  
P 284b8, D243a7 : de la dmigs pa'i nyon mongs pa'i phra rgyas yod pas... ; 真  
諦 259c6~7 : 縁彼為境惑随眠眼生故。

83) AKBh 301, 10~11 : yatra netum śakyate tatrātmakāmanāivaṃ を yan na netum  
śakyate tatrātmakāmenāivaṃ と訂正。cf. P 285a1: gang shig drang bar mi\*  
nus pa de la ni 'di ltar. \*ni (D 243a7). 但し、チベット語訳は、ātmakāmenāiva  
の句を欠く。真諦 259c8~10 : (若義証此聖言可得了達、自愛人於中必心信受)  
若不爾、自愛人於中…。玄奘 卷二十の九左 : 所有於中不能通積、諸自愛者…。

84) AKBh 301, 13 : tarhy asādhyā を tarkasādhyā と訂正。P 185a1~2, D243b:  
gdon mi za bar rtog pas sgrub pa ma yin no... 真諦 259, 10-11 : 非必定由自思  
量之所能解。玄奘 卷二十の九左 : 非尋思境。

adhvano 'py utpadyate | anekakṣaṇikatvād anāgatasyādhvanaḥ |  
gatam etat yat prasaṅgenâgatam |

(AKBh 終)

<キーワード>

三世実有 俱舍論 世親 説一切有部